

フィールドに恋をする??

私とフィールドの関係は恋愛関係によく似ていると思う。いつも感情をかき乱される。もう絶対来るもんかと、嫌悪感を覚えたことも数知れずあるけれど、一方でこんなふうに他者と心を通わせたり、人の営みに寄り添うことはもう一生ないだろうと思うほど幸福感を覚えた瞬間も確かにある。私はフィールドが好きなのか、嫌いなのか、実際よくわからない。帰国してすっかり日本の暮らしに落ちついていても、私のフィールドに対する感情はいまだアンビバレントに揺れ動いている。

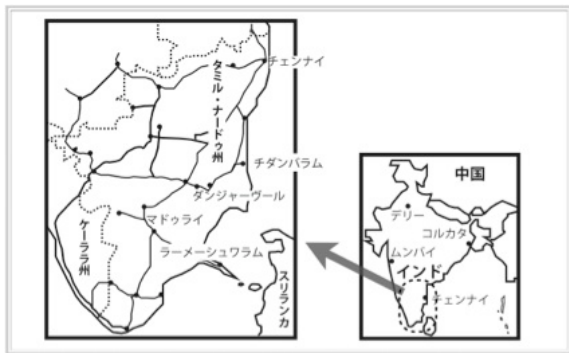


図 タミル・ナードゥ州チダンバラム

私の調査地は、南インドの最南端に位置するタミル・ナードゥ州中部のチダンバラムである。まちの真ん中に 20 ヘクタール程の大きな古刹のヒンドゥー教のナタラージャ寺院を有する門前町である。私は、この寺院で専属司祭を務めるおよそ 350 人の寺院司祭（ディークシタル）とその家族の暮らしや宗教実践について調査をしている。かれこれ、足掛け 6 年になる。当初、現地のタミル語はおろか、英語でのコミュニケーションも危うく、ヒンドゥー文化に対する知識もほとんどもちあわせずに飛び込んだ私は、今思えばなんと向こう見ずな人間だったろうか。当然、誤解や齟齬や勘違いは数知れない。高位カーストである寺院司祭たちの気位の高さに振りまわされては四苦八苦し、ときに厳しい浄・不浄の慣習に我が身も排除の対象になり、不器用にいろんな出来事に巻き込まれ、調査地での生活は泥臭い経験の連続だった。



踊るシヴァ神ナタラージャ

良き娘とドブネズミのはざまで

メディアで報道されるような急速な経済発展や都市部の裕福な中間層の瀟洒な生活は、まちがいなくインドの一部である。もちろん、ローカルな寺町での暮らしや文化や宗教も、都市やグローバルな動向と共振しながら確実に変容をしている。でもやはり、それは一部でしかない。

チダンバラムで、伝統を重んじる司祭集団のなかに入り込み、保守的なヒンドゥー教の門前町で暮らして調査するには、服装や食べ物や人間関係まで、私が守るべき決まりがいくつもあった。ピュア・ベジタリアンになる、お酒やタバコを嗜まない、洋服を着てはいけない、走ってはいけない、年頃の男性と言葉を交わさないなど、それはまさに禁欲のフィールドワークだった。そのうち、彼らの慣習に背くようなことは自然と避けるようになり、素早くサリーが身につけられるようになって、タミル料理が作れるようになって、玄関のコーラム（米粉などをつかって描く魔除けの幾何学模様や吉祥文様）が描けるようになって、一緒に現地語で歌が歌うことができるようになって、「ナッラ・ポンヌ（タミル語で「良い娘」の意）」と呼ばれるようになった。しかし、いくつもの仮面を被った上で、そんなふうで紹介されるたび、私はどこかむず痒さを覚えていた。



大祭の山車の通り道に描かれるコーラム



司祭の子どもたちが引くおもちゃの山車

そしてもうひとつ、司祭たちによくからかわれるときに投げかけられたのが「ペルチャーリ（タミル語で「ドブネズミ」の意）」という言葉である。ナタラージャ寺院には「ペル

チャーリ・ネイヤ・ポードゥ・ティリチャライ・ムランギ（ドブネズミはお供え物のランプの芯をみつければ飲み込んでしまう）」という、目聡い人や食い意地の張った人をからかう言いまわしがある¹。どこからともなく通過儀礼や祭礼があることを突き止めては顔をだし、根掘り葉掘りと質問を投げかける。最後には、饗宴の食事のご相伴に預かり、寺院から司祭家族に配られるお弁当をお裾分けされることもしばしば。そんな私の姿は、まあ確かに寺院のドブネズミのようだと揶揄されても仕方ない。

私のフィールドワークは、このチダンバラムの生活者としての「ナッラ・ポンヌ（よい娘）」と調査者としての「ペルチャーリ（ドブネズミ）」の間を行ったり来たりする時間の繰り返しのなかにあった。この6年で、私とそして彼らを取り囲む世界はめまぐるしく変化した。物質的な環境世界はどんどん近代化されていった。ディアスポラ信者も増え、同時に司祭が海外に招聘される機会も増えた。寺院と政府の激しい法廷抗争や駆け落ち事件もあった。高校生だった司祭の娘たちは、結婚して母となり、まだあどけない子どもだった少年が、号泣する私を慰めるやさしい青年になった。



大祭7日目の飾り付け（寺院の正面入り口）

¹実際ヒンドゥー寺院には境内の此処彼処にバターや油の入ったランプを供える献灯台があり、境内には大小さまざまなネズミだけでなく、リスやサルやヤギなど様々な動物がいる。



境内に残る 17 世紀の天井画（大祭の様子を描いたもの。現在も大祭時にはほとんど同じ光景がみられる）

こんなふうに遠く離れた異国の他者の人生にひとときでも寄り添い、私はいったい何が見たいのだろうか。彼らはカーストの位が高いからといって現代の社会で優位に生きているわけでは決していない。伝統的な宗教世界に軸足をおく彼らは、とても不器用に今を生きているようにも見える。宗教は人を（不）自由にするのか、共生の哲学を示していくのか。目に見えない世界（神々の世界）と彼らの人生の間で築いている物語や関係はどんなものなのか。カーストにこだわって生きることが幸せなのか。自由恋愛は幸せなことなのか。



近所の青空市場

チダンバラムに思いを馳せる時、そんな疑問がふつふつと沸いてきてはつい考えずには
いられなくなる。そしてもっと知りたいと思う。憎らしいけど、結局は好きなのだ。それ
はなんだかフィールドに恋をしているかのように。